

北 どころあ

第54号 2020年9月1日（毎月1日発行）

「どころくろ俳壇・独断流俳句評」

赤川冬人 とうじん

本誌で「どころくろ俳壇」がスタートしたのが第2号の2016年5月から。創刊号を読んだ近藤昌平さんの「是非とも俳句欄を作って欲しい」との要望に応えた。参加者は近藤さん、古くからの句友の原博巳さん（俳号・富久光）、そして素人のわたし。以来、レギュラーとして現在まで続いている。

聖五月バイブルも売る
古本屋

先月号で近藤さんの句歴を紹介したので、この機会に、どころくろ俳壇に登場していただいた俳句を紹介させていた

これが「どころくろ俳壇」での近藤さんの最初の句。リッブサービスで当店のことを詠んでくれた。近藤さんは「百円本棚」の名人で、こんな本

があつたのかと、店主のわたしが驚くような掘り出し物を見つけていた。
満月やオリンピックの
金メダル
これは、リオ五輪の水泳で金メダルを取った金藤理恵選手を讃えた句。満月を金メダルに例えた感覚がすばらしい。

去年今年（こそことし）
平成を生き昭和の子

元号が令和に移るときの句。よくぞ生き延びたという感慨と、昭和生まれのプライドが感じられる。

秋灯火のらくろと会う
古本屋
先月号で紹介した句だが、「のらくろ」が「のろくろ」と誤記されていた。初期配布のものは訂正されていません。申し訳ありませんでした。
爆心地炎昼の
フリーマーケット

代表句として紹介していた句にも誤りがあった。先月号では「炎昼」を「炎天」と書いた。あとで「炎昼」だったと気づいたのだが、わたしの中では「炎天」で句が出来上がってしまっている。「炎昼」の方が身近で近藤さんらしいと思うのだが、「炎天」の方が景が大きい。天上の近藤さんとも相談したのだが、結論は出せなかった。事実だけを記しておく。

桜湯に幼心の開きけり

富久光さんの句。近藤さんと共に俳壇の幕開けを祝っていたのだ。塩漬した桜の花が、お湯の中で開いてゆく情景が目につく。昔の想い出もゆつくりと花開く。

「どころ猫書房」、近藤さんは生前、わたしの古本屋のことをそう呼んでいた。あるとき「どころ書房」ですよと訂正すると「ありや、いつの間にか猫が消えてしまいましたね」と笑われた。余計なことを言ったと



星月夜葉書一枚出しに行く

あて先は家族だろうか、友人だろうか。ポストまでの道が楽しい。

春光や儂きものに捨て畑

耕す者もいず打ち捨てられた畑。春の訪れは、その無残さを浮きぼりにする。

第4号(2016年7月)より、片岡正人さんと隆愚さんが参加。片岡さんは川柳が本職のようだが、俳句も情感があつて味わい深い。

夕顔の真白き闇の深さかな

美しきものは、闇の深さを倍加する。

父と子の短き電話十二月

父子の微妙な関係、川柳のエキスが少々。

啓蟄や客十人の映画館

啓蟄と、土の中の暗渠のような映画館の取り合わせがお見事!

隆愚さんは、近藤さんの格致中学(現・格致高校)時代の同級生。農家の生活に根ざした句が魅力だ。

炎天や終(つい)の

棲家(すみか)の墓掃除

「人居」を意識する年齢になると、掃除も余計に念入りに……。

故郷やたわわの柿がなりしまま

空き家が増えて、過疎がますます深刻になっている。

大吉を強く結びて初詣

豊作&健康祈願。良き年でありますようにとの願いを込めて。

第29号(2018年8月)より、竹地恵美さん参加。近藤さんとは同年齢の古くからの句友である。

暖かや老俳友は今日も留守

近藤さんのことを詠んでいる。毎日のように店に顔を出していただいていた頃が懐かしい。

八十路にも熱き血潮や緋のカンナ

情熱に年齢は関係なし! 九十歳で亡くなられるまで、北地区俳句会の代表をつとめられていた。

乳色の霧の底なる目覚めかな

竹地さんは長らくリウマチを患われていた。病状が悪化した時は、死

が身近な存在だったのではないだろうか。

第33号(2018年12月)より、竹地さんの紹介で大槇三代子さんが参加。

牡丹鍋老いに抗ふ男たち

自分で狩ったイノシシだろうか。酒を酌み交わして、まだまだやれると意気軒昂!

葉桜や未だ帰らぬ家出猫

老齢になると、新しい猫を飼うのは難しい。あの猫は今、どうしているのか。

定宿の女将老いたり夕河鹿(かじか)

こうしたしみじみとした哀感や寂

寥感は、男には表現できないと素直に思う。

さて、最後に自分の句だが、ありきたりな表現はしたくないとの思いが空回りして自意識過剰、独りよがりな句が多いのに赤面する。せめて俳号だけは俳句らしくと、厳寒の一月に生まれたので冬人とした。

凧(こがらし)を十字に裂きて

異人墓地

近藤さんに誉めてもらった句。横浜の外人墓地が舞台の小説を読んでいて浮かんだ。

一つ得てひとつ失う去年今年

母親を亡くした心情を詠んだ。わたしの句ではいちばん評判が良かった。

快便や平々凡々五月晴れ

自分でいちばん気に入っている句。欲張ればきりが無い。そこそこ健康で、古本屋の仕事がこのまま続けられればと願っている。

あなたも俳句や短歌を作ってみませんか? いつでも参加を歓迎します。



井上靖『敦煌』

「西域」への視線の大きさ

戦後の日本の小説は、1960年

前後を境に大きく変わったように思えます。戦前からの作家が退場し、戦争体験の咀嚼や旧社会の葛藤から離れた、別な眼差しを獲得した世代が担ったことです。井上靖『敦煌』は、いきなり「西域」という異世界の歴史に降り立った小説として、目を見張るものがありました。

「西域」とは、中国の西に隣接する小国家の地域です。多民族からなり、勢力を消長させながら、中国への進出をねらいます。架空の主人公趙行徳が、西夏の国に惹かれ、歴史に翻弄される様が描かれます。

行徳は郷里湖南地方から首都開封に出て、科擧の試験に臨んだのは、北宋の1026年。最後の関門を待つ間に居眠りをして失格します。

街をさまよう内に、板の上に素裸で寝かされ、豚肉の値段で切り売りするという商人から女を助け出したら、女は「只で恵まれるのは厭だ」と、1枚の布きれをくれました。そこには、見たこともない文字が刻まれていたのです。その「西夏文字」の国、

西夏をめざす旅に出ます。

旅先の西域で、漢人による西夏の駐屯部隊の兵士に組み込まれます。

の本隊に反旗を翻し、報復される羽目になります。行徳はその時、都城

のすべての仏典を郊外の洞窟寺の空間に集め、壁で塗り込めたのでした。部隊長は戦死し、行徳のその後の

行方は書かれていませんが、1035年のことのようにです。

この小説を読んだ若き日、私はエ

キゾチシズムに目を奪われましたが、再読して戦火を体験した井上靖の行徳に託した、戦後を生きる苦悶が塗り込められていることに気づきました。というのは当初、行徳は「死ぬことなど恐れてはいない」と戦に

明け暮れますが、占領した都城で助けた女が、行徳への義理立てから城壁から身を投げると、「故人に対する愛情でも、悲嘆の情でもなく、そうした人間的な感情を濾過した純粋なある完全なものへの賛嘆のようなものであった」との心境になります。

やがて、仏典の翻訳に没頭するうちに、「財宝も生命も権力も、所有している者の持ち物だが、経典は誰のものでもない。焼けないでそこにあるだけでよい」の心境に。「永遠といった思いが行徳の心を驚掴みにした」と記しています。

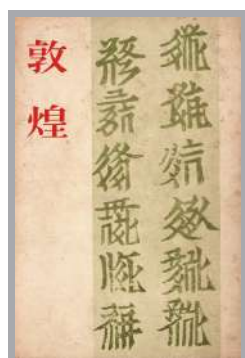
行徳の活躍の期間はほんの9年間。その一方、井上靖は西域に長い時間尺度を持ち込み、覇権争いの無意味さを描いたことになりました。

この作品以降、敦煌への熱い視線やシルクロード横断旅行の西域ブームへと発展して今に至っています。次回は、倉橋由美子『パルタイ』を取りあげます。

また読んでみたい本⑤2

青年たちに

音谷 健郎



【講談社版の函】

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

第52回は、井上靖の『敦煌』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

行徳は他民族とのいくつもの戦闘に加わり、豊富な知識で部隊長の参謀にされます。命令書の西夏文字を読み解く必要から、西夏文字の習熟に励み、仏典にも近づきます。部隊は、都城を任かされるまでになります。部隊長は残忍な西夏軍

約900年の後、これらは「敦煌石窟」遺産として蘇ります。取り出されたものは、多くの仏典にとどまらず、地誌や梵語、西蔵語の典籍や事典、マニ教、景教の教義書などがあり、豊富な東西文化の交差点だったことを物語っていました。

「草花の博物誌」

タヌキマメ 動物の頭のように見える花

すっと伸びた茎の先に、穂を出し、しり褐色の光沢のある毛がはえてそこに鮮やかな紫色の花を野原で見ます。このガクは花が散って実を結つけたことがあります。見つけたら、いつでも、実を包んでいて、いつまでその花を正面からよく見てみましょ。も褐色の毛は残っています。う。何だかイヌやネコなど動物の顔。花があたかも動物の顔のように見えること、そして、ガクにタヌキの毛がはえているところから、タヌキマメと名づけられたようです。誰が名づけたのかわかりませんが、花やガクの特徴をとらえ、うまく名づけたものだと感心させられます。



タヌキマメという和名は、飯

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

沼慾齋(よくさい、本名は長順、一七八三〜一八六五)が、安政三年(一八五六)から文久二年(一八六二)

ら庄原あたりの内陸部にかけて、点々と稀にタヌキマメの生育地が知られているほどに減っています。

にかけて完成させた日本では初めての植物図鑑「草木圖説」草部の第三巻に出ていますが、慾齋は、その中で「原野ニ多生シ」と記しています。その頃、つまり、今から百六十年前、幕末の頃はいたるところの野原で多く見られたことでしょうが、今ではめっきり少なくなり、広島県では沿岸部か

タヌキマメは夏の終わり頃から秋にかけて花をつけ、実を結び、種子を撒ぎちらすと、枯れていき、翌春、種子から芽生えて成長し、再び、紫色の花をつけます。野原の荒れを食い止め、タヌキマメの種子がよく芽生える野原に戻していきたいものです。

ナメラダイモンジソウ 秋の訪れを告げる花

滝のしぶきをかぶる岩壁に咲くナメラダイモンジソウの白い花は一際目立っています。山に秋が訪れるころ、岩壁一面に白い花をつけているナメラダイモンジソウは実にみごとで、滝のしぶきのかかることも忘れ、見とれてしまいます。

びらは漢字の「大」そっくりに開いています。なるほど、大文字とはよくこの花の特徴をとらえ、名づけたものだと感心させられます。

花びらの並んでいようすからダイモンジソウと名づけられたように、花びらの並び方が「人」という漢字のように見えるところから「人字草」、

近づいて花をよく見ると、白い花

つまり、ジンジソウと名づけられた花もあります。

ジンジソウはナメライモンジソウと同じユキノシタ科の花です。ジンジソウは五枚の白い花びらのうち、上側の左右にのびている花びらが、とても小さく、三枚の花びらが「人」という字のように見えるのです。とてもよく似ているのに、むかしの人々は花びらの並び方から二つの花を見分け、それぞれの特徴を漢字になぞらえて、みごとに名前をつけたものだ、つくづく感心させられます。

ナメライモンジソウが花ざかりのころ、ジンジソウも花ざかりを迎



(写真はいずれも小川光昭氏撮影)

えています。ナメライモンジソウと、花びらの並び方で区別がつきにくいときは、上側の花びらを調べてみましょう。上側の花びらに斑点があったらジンジソウ、斑点がなかったらナメライモンジソウです。ダイモンジソウは北海道から九州まで、広い範囲にわたって自生しているばかりではなく、海岸近くから高山にいたるところに分布していますから、葉の大きさや形、葉の切れこみがさまざまです。それら葉の違いから、中国地方のダイモンジソウは、発見された山口県の滑(なめら)国有林にちなんで、ナメライダイモンジソウと名づけられました。ナメライ

ダイモンジソウの花盛りを過ぎると、山はみごとに紅葉の季節を迎えます。

「つれづれ歌談」③

松岡 初枝

九月というとまだ残暑厳しい頃ですが、半ば過ぎて中秋の名月の頃になると、夜はやつと涼風が吹くようになります。月見酒には名歌がつきもので、多くの人が詠んでいます。

詩歌(しいか)といえは漢詩も忘れてはなりません。詩聖・杜甫。詩仙・李白。五言絶句、七言律詩。定型詩の音(おん)も美しく、酒を詠んだ名詩が数多くあります。御一読するもよしです。

和歌の名人達も漢詩や古歌の嗜みが深く、多くの歌に詠み込まれ、教養のあるところをチラつかせています。本歌取り(ほんかどり)と言われ、主に新古今和歌集に多く用いられた高等テクニクです(だから面白くないという説もある)



ります)。

さて、酒の歌が多くあるのは、古くは酒席の余興だったり、物思いの一人酒だったり、御神酒(おみき)として神に供えた酒もあり、飲めばよい心持ち。もちろん悲しい酒もあります。

・ 駿(しるし)なき物を思(も)はずは一杯(ひとつき)の濁れる酒を飲むべくあるらし

(万葉集 大伴旅人)
・ 白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり

(路上 若山牧水)

若山牧水は宮崎県出身の歌人で、早稲田に学び、酒好きで有名ですが、晩年(とは言え四十三歳没)は埼玉県所沢市あたりに住み、私の高校の同級生に牧水の孫がいきました。

「あら、いいわねえ、牧水の孫だなんて」

「ただの飲んべえだって祖母が言ってた!」

有名歌人も、家族にとってはただの飲み助。百薬の長ほどの量で止められない。酒が悪いわけじゃないんです。

ドアをノックする音が響いた。スラックス式の白いナース服を着込んだ女性が入って来た。親しみやすい微笑を浮かべている。落ち着いた物腰に、有能な人なのだと一目でわかる。年齢は五十歳を超えているだろうか。

「介護病棟の主任看護師をしている加藤と申します。ヨシノサブロウさんに面会したいということですが」

「ヨシノサブロウ……」

「仮の名前です。吉野家さんで保護されたものですからね。おなか为空いていたので、牛丼の匂いにつられたんじゃないでしょうか。ここにはすでにイチロウさんとジロウさんが保護されているので、サブロウさんにさせていただきました」

テレビのニュース番組の解説を思い出した。認知症患者の行方不明者が急増しているという。警察に捜索願いが出ているれば身元が確認できるが、そうでなければ行き場を失ってしまうので、仮の名前で住民票が作成され、生活費や介護費用は生活保護で賄われているらしい。

「テレビで顔を見て、ひよっとしたら知っている人かもしれないと思って訪ねて来たんです」

用意してきた理由を説明した。

「広島からですか……、遠くから来ていただいたのですね」

値踏みするようにわたしの身体を眺めた。

「今は若い人の間で、そういうファッションが流行っているのかしら？」

笑顔で尋ねた。

「失礼だけど、そのワンピース、着物をほどこいて作った手縫いでしょ？わたしの母が着ていた洋服を思い出

食堂やリクレーションルームとして利用されているのだろう。

五分も待たされただろうか。加藤さんに車椅子を押してもらって、ヨシノサブロウが姿を現した。脳梗塞で右半身が不自由になって、車椅子での生活が続いているらしい。

加藤さんが老人の耳元で、大きな声でわたしの偽名を告げた。耳も遠くなっているのだろう。わたしが知っ

あうん

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子④8

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

したの。とてもおしゃれな人で、お金がないときでも、自分で工夫してファッションを楽しんでいた……」

「祖母からもらいました」

彼女が笑顔で頷いた。

「面会時間は過ぎていくけど、特例で認めます。サブロウさんにとっては三年目で初めての面会者ですからね」

リノリウムの床の広い部屋だった。

取りなすように加藤さんが言った。

「どうです、あなたの知っている方ですか？」

「よく似ているんです。でも、もう何年も会っていませんから……」

二人だけで話をさせていただけな

いですがと懇願して、十五分の時間をもらった。

一方的にわたしが話した。

「吾朗さんが連れて行ってくれた通天閣……」

「ジャンジャン横町の将棋会所で吾朗ちゃんが将棋を指している間、わたしは串カツを食べて待っていて……」

「初めて食べたテッチリ、うまかったなあ。最後に吾朗ちゃんが雑炊にしてくれて……」

しゃべればしゃべるほど、大切な思い出が消えていくようで、心の空洞が広がっていく。病気なのだから仕方がないと自分に言い聞かせても、澱のような後悔が溜まっていく。これじゃあ、恨み言の一つも言えないじゃないの。

諦めて背中を向けたときだった。

「晴美ちゃん……」

振り返ると、老人が立ち上がった。一緒に暮らしていた当時と同

じ優しい目をしている。涙が溢れだした。

「どうですか？」

部屋に入って来た加藤さんが尋ねた。

「やっぱり人違いのようです。ご面倒をおかけしました」

彼女の顔に落胆が浮かんだが、すぐに笑顔を老人に向けた。

「部屋に帰って、休みましょうね」

老人の目はすでに輝きを失っている。



介護施設を辞したわたしは、街中にある神社の鳥居をくぐって、境内の中へと入って行った。手水舎(ちようずや)で手を清めて、拝殿の前に鎮座する狛犬の頭を撫でた。向って右側にある口を開けた阿形(あぎょう)の狛犬である。

中秋の満ちた月に照らされた狛犬が、ブルブルと身震いしたかと思うと、影が抜け出るように姿を現した。わたしの頬をべろりと舐めて、地面に蹲る。その背中におぶさって、ふさふさとした鬣(たてがみ)をしかり握った。獣臭が鼻腔に充満する。狛犬が一気に飛翔した。街の灯りがどんどん小さくなる。来るときは怖くてしがみついているだけだったが、二度目だと少し余裕ができて、わきの隙間から下界を覗くことができた。風圧がどんどん強くなって、スピードが上がっているのがわかる。夜景のイルミネーションが流星のように去って行く。

いつの間にか風が止んで、地面に蹲った狛犬にしがみついている自分に気づいた。背中から降りると、またべろりと頬を舐められた。そして、ゆっくりと阿形の石像に歩み寄ると、影が溶け込むように同化した。満月の光に自分の手をさらすと、

また老人の手に戻っている。阿形の狛犬にまたがれば、自分の姿を若返らせることができる。咩(うん)形の狛犬にまたがれば、時間を遡ることが出来る。欲張って両方を実現することはできない。

結局、大阪の新世界で一緒に暮らしていた半井吾郎が、どうしてわたしの前から姿を消したのか、理由を訊くことはできなかった。時間を遡ればわかったのだろうが、おばあちゃんの姿で会いに行くのはしゃくではないか。

あの人には宝物をもらった。父無子(ててなしご)を産んだと散々陰口をたたかれたが、准看護婦の資格を取って、懸命に育て上げた。今ではわたしも三人の孫を持つおばあちゃんだ。

ほんの一瞬だったが、わたしのことを想い出してくれた。それだけでも、会いに行つた甲斐がある。

(これで心おきなくお墓に入れます) 拝殿に向って頭を下げた。余命半年だと医師から宣告されている。狛犬の背中に乗れるのは寿命の灯が尽きようとしている者だけ。それが、この黄泉平坂(よもつひらさか)神社の古(いにしえ)からの掟なのである。

まちの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日(2月は店内整理で全休)
- TEL: 090(9913)3052
- 営業時間 9:30 ~ 18:30 (19:00 から変更)

※広島銀行庄原支店の手前(三次側から) ※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1 回 2,000 円 半年間 9,000 円 1 年間 15,000 円 >



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「夏への扉」

ロバート・A・ハインライン 著 ハヤカワ文庫

冒頭の描写で魅了された。愛猫のピートと暮らす家にはドアが11もある。寒い冬になるとピートはその全部のドアを開けてくれと催促する。夏の庭への扉がどこかにあると信じている。

時は1970年、恋人に裏切られて仕事も失い、絶望したぼくはピートと一緒に冷凍長期睡眠に入ることを決意する。しかし、30年後に目覚めたぼくは、ピートがいないことに愕然とする。SF



の大御所の描く2000年は、ロボットが身のまわりの世話をし、自家用車が空中を飛行し、タイムマシンまで……。夢のある空想が楽しい。そして、ハッピーエンドの結末が嬉しい。厳しい残暑の中、「秋への扉」はないものか。

「羊と鋼の森」

宮下奈都 著 文春文庫

2016年本屋大賞受賞作。今まで本屋大賞の作品を何作も読んだが、共感できた数少ない作品のうちの一つ。「羊と鋼の森」とはピアノの調律師の世界の比喩。ピアノは打楽器だ。鍵盤を指でたたくと、フェルトでできたハンマーが鋼の弦をたたいて音を出す。そのフェルトは、羊毛でできている。

将来の目標もなく平凡な高校生だった主人公が、天才的な調律師の「音」に魅せられて、調律師という神秘的森深くに分け入って行く。無垢な人間の自我の目覚めが心地よい。職場の先輩の調律師たちも個性的だ。俗臭を感じさせない静謐な筆致がその魅力を高めている。



「おおきく振りかぶって」

ひぐちアサ 著 講談社

ネット無料配信のアニメを見て再読した。2003年から「月刊アフタヌーン」で連載開始、途中、作者の産休をはさんで現在でも連載が続いている。王道である熱血高校野球モノだが、主人公はおそらく漫画史上、最弱のヒーローなのではないか。体格は貧弱、投げる球はへっぺ、人見知りでいつもオドオド、しかし投げることだけは誰にも負けないぐらい大好き。



公立高校の新設野球部が、肉体的にも技術的にも、メンタルでも、科学的なトレーニング方法を取り入れて選手が成長する過程は説得力がある。実際の指導者にも大いに参考になるのではないかと。現在、33巻まで刊行。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣（店内専用通貨）であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

どらくる俳壇&歌壇

開戦も敗戦もしる生身魂いきみたま

ありし日の句友と同じ夏帽子

原爆忌静かに雨の川へふる

栗の毬い青空の中まだ縁

切られた！飛起きれば百足むか逃ぐ

屍が軽くなるまで蝉時雨

やっとここに土用の内に干す梅は

まろく香ぐはし天地の恵み

投稿&寄稿

「猛暑の中の部屋で」

赤川仁洋

近藤昌平

冨久光

片岡正人

隆愚

大槇三代子

赤川冬人

松岡初枝

※参加を歓迎します。

やした塊が枕元で蹲る気配がして、手を伸ばして身体を撫でてあげると、ゴロゴロというくぐもった鳴動が聞こえてくる。

野良猫だったドラマと同居するようになって、もう三年になるだろうか。猫を飼うのは初めてなので、ひもじい思いをしないようにと餌をたっぷり与えていたら、美人さんがたちまち中年ぶとりのおばさんになってしまった。この猛暑で少しは夏痩せしてくれるかなと期待していたのだが、食欲がさほど落ちることもなく元気である。

夜半に目が醒めて、隣のドラマを見ると、バンザイのような格好で前足を伸ばして、ベッドヘッドの金属の棧に肉球を押し当てて、少しでも体温を下げようと工夫している。日中は部屋の端に設えてある疑似暖炉のタイルの上に腹這いに寝そべって、部屋の熱気を防壁している。

古本屋の看板猫にと期待したが、爪とぎがひどくて店に置くのは断念した。ソファのフェイクレザーや段ボールなどの少し柔らかいものが大好きで、心地良さそうにバリバリと大きな音を立てている。

飼い猫は、飼い主が爪を切つてあげているようだが、野良だったドラ

マは自分で爪の処理もしている。丹念に爪先を舐めて湿らせて、爪を噛んで引っこ抜くようにする。爪の形をした表皮が、ときどき床に転がっている。捨てることができずに、猫のヒゲと一緒に保管している。

ドラマがおばあちゃんになって、暑さ負けするようになったら、エアコンの購入も考えるかな。しかし、ドラマが何歳なのかも、わたしは知らないのである。



短期連載寄稿 林原正好（鳥取県倉吉市）

「毛利家臣の赤川氏について」（その3）

今回から4回にわたり赤川氏の系譜についてみてみたい。萩藩が江戸時代享保年間に藩内諸家から伝来の古文書や系譜を提出させ編集した『萩藩閥閥録』に載っている赤川氏の系譜の内容を確認した上で、系譜上の重要な人物と出来事及び系譜の問題点について述べてみる。

1 『萩藩閥閥録』の赤川氏系譜

『萩藩閥閥録』巻32「赤川勘解由」の中に赤川氏の系譜（以下、「閥閥録赤川系譜」という）が掲載されている。

この系譜には、土肥実平から始まり小早川姓となり更に赤川姓となる流れが載せてあり、『萩藩閥閥録』が編集された当時の赤川惣領家当主であった赤川勘解由政賀までの31代が載っている。

ここでは、赤川氏の出自を確認するため、土肥実平から赤川親定までの22代の記載内容を注記を中心に記してみる。

○ 桓武天皇十一代の土肥実平を遠祖としている。

○ 遠平、景平、茂平、忠茂、清茂、茂教、貞茂と続いている。景平の注記として「小早川次郎」とあり、小早川姓となっている。

○ 政忠、茂忠、義種、秀久、通守、重房、重政、安房と続いている。政忠の注記として「赤川筑前守」とあり、赤川姓となっている。

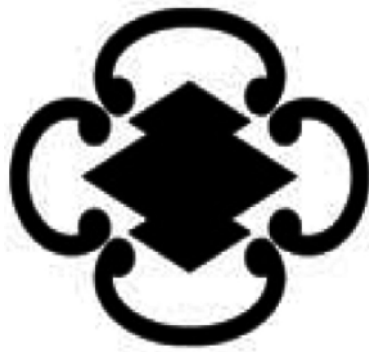
また、「数度合戦盡粉骨、賜源氏、其上被下置給地之御教書、住信濃国赤川」とあり、給地の御教書を与えられたとある。給地の所在は明記されていないが、信濃国赤川に住んだとされており、給地の所在は信濃国赤川と推測される。すなわち、政忠の時に、信濃国赤川を下し置かれて住み、赤川姓を称したと思われる。

○ 忠政、義重、親次、茂家、茂正、親定と続いている。忠政の注記として「時親公始芸州御下向之時西国工下」、義重の注記として「忠

政義重父子共芸州罷下、毛利之御家守護」とあり、忠政と義重の時に毛利時親公に随って芸州に下っている。

また、親定の注記として「自是以前之御証文往古焼失仕不分明」とあり、焼失のため以前の証文がわからないということである。

〔赤川氏の家紋〕
鑲に松皮菱



『家紋と家系』事典（丹羽基二著）によると、松皮菱は、清和源氏武田氏支流や小笠原氏支流で用いる、とある。また、小笠原氏の支流は松皮菱に別の紋を組み合わせている。例えば、赤澤氏は松皮菱に十文字。

赤川政忠の時に源氏を賜り信濃国赤川に住んでおり、このことと関係があるかもしれない。

【赤川氏系譜】（『萩藩閥閥録から抜粋』）

桓武天皇十一代

土肥実平 — 遠平

景平 — 茂平
小早川次郎 本庄左衛門大夫

忠茂 — 清茂

茂教 — 貞茂

政忠 — 茂忠

赤川筑前守、数度合戦
盡粉骨、賜源氏、其上
被下置給地之御教書、
住信濃国赤川

義種 — 秀久

通守 — 重房

重政 — 安房

忠政 — 義重
時親公始芸州御下向 忠政義重父子共
之時西国工下 芸州罷下

親次 — 茂家

茂正 — 親定

どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

一 硬式テニス参加者募集 一

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

・火曜日 (9:30 ~ 12:00)

・水曜日 (9:30 ~ 12:00)

・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



どら書房委託販売コーナー

★「天馬書林」

新書の教養書や人生指南本、ノンフィクションが充実。

★「サワちゃん文庫」

中国、日本の歴史書、思想書が中心のラインアップ。

各専用棚で好評販売中！

一 絵本の無料レンタル 一

イベントや集会の時などにお使いください。

「箱貸し」します。

図書館の除籍本や販売には難のある本ばかりなので、破損しても大丈夫です。

ご希望の方はどら書房まで。

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター(現地記者)募集!
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載している
ので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

◇どら書房郷土資料本コーナー◇

郷土史関係の本や地元で出版された本、
地元の方の作品集(短歌俳句小説等)、地
元に関係する本を揃えています。非売品
で閲覧&貸出(無料)しています。寄贈も
歓迎します。

どら書房無人野菜販売コーナー

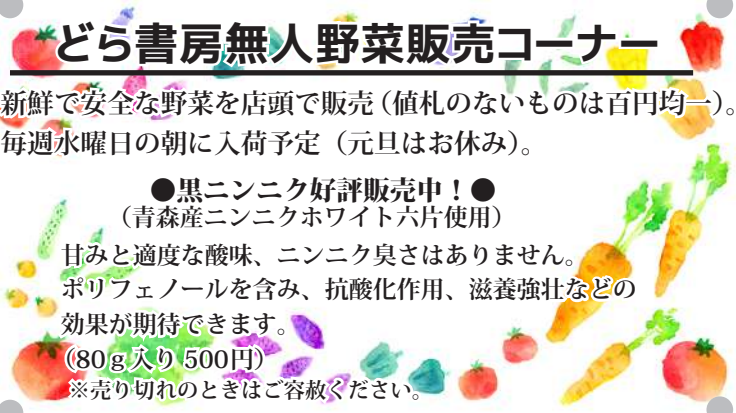
新鮮で安全な野菜を店頭で販売(値札のないものは百円均一)。
毎週水曜日の朝に入荷予定(元旦はお休み)。

●黒ニンニク好評販売中!● (青森産ニンニクホワイト六片使用)

甘みと適度な酸味、ニンニク臭さはありません。
ポリフェノールを含み、抗酸化作用、滋養強壮などの
効果が期待できます。

(80g入り 500円)

※売り切れのときはご容赦ください。



発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@nifty.com
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン: ROUTE183
協賛：九日市愛好会

謝!
◇倉田百三研究の第一人者
だった土居縁さんが八月二十
三日に亡くなった。腰痛を訴
えて受診、末期の膵臓癌との
診断で、それから一週間も経
たないうちの急逝だった。八
十七歳だったという。二週間
程前に、人を介して蔵書を何
冊かいただいたばかりだった
ので、信じられない。本誌の
熱心な読者でもあった。庄原
は大切な人を失った……。
◇猛烈な残暑ですが、九月の
声を聞くとホッとします。

編集後記

◇近藤さんの俳句の
「生身魂」とは秋の季
語で、お盆に感謝の想
いを込めて、両親をも
てなす作法のことをい
うらしい。ご先祖様だ
けではなく、生きてい
るときの両親にも感

